

# 京 都 大 学

# 教 育 学 部 紀 要

## Ⅳ

### 特集 五人の教育学者 — その生涯と業績 —

1. 谷本富教授の生涯と業績
2. 小西重直教授の生涯と業績
3. 木村素衛教授の生涯と業績
4. 高橋俊乗教授の生涯と業績
5. 篠原助市教授の生涯と業績

### 特集 入学試験制度に関する総合的研究

1. 序
2. 日本の入学試験制度の沿革
3. 入学試験制度の現況
4. 入学競争の現状
5. 高等学校入学試験に対する  
中学三年生の適応態勢
6. 入学試験競争に対する適応態勢
7. 入学競争の社会的条件
8. シムポジウム：諸外国の入学試験制度

# 京都大学教育学部紀要 IV

## 目 次

### 特集 五人の教育学者 —— その生涯と業績 ——

特集によせて	2
1. 谷本富教授の生涯と業績	池田進 3
2. 小西重直教授の生涯と業績	片岡仁志 30
3. 木村素衛教授の生涯と業績	前田博 40
4. 高橋俊乗教授の生涯と業績	中島萬朶 55
5. 篠原助市教授の生涯と業績	下程勇吉 66

### 特集 入学試験に関する総合的研究 本学部全教官による共同執筆

1. 序	91
2. 日本の入学試験制度の沿革	96
3. 入学試験制度の現況	125
4. 入学競争の現状	136
5. 高等学校入学試験に対する中学3年生の適応態勢	163
6. 入学試験競争に対する適応態勢	177
7. 入学競争の社会的条件	201
8. シンポジウム：諸外国の入学試験制度	256

文献紹介	池田進・森口兼二・下程勇吉 268
講義題目	272
修士論文および本科卒業論文	275
京都大学教育学専攻卒業生著作目録(補遺)	278
英文要約	279

特 集

五人の教育学者

— その生涯と業績 —

- 
- 
- |    |   |   |    |
|----|---|---|----|
| 1. | 谷 | 本 | 富  |
| 2. | 小 | 西 | 重直 |
| 3. | 木 | 村 | 素衛 |
| 4. | 高 | 橋 | 俊乘 |
| 5. | 篠 | 原 | 助市 |
- 
-

## 特 集

# 入学試験に関する総合研究

- 
- 
1. 序
  2. 日本の入学試験制度の沿革
  3. 入学試験制度の現況  
— 現行入学試験制度に関する法制と制度の現状について —
  4. 入学競争の現状
  5. 高等学校入学試験に対する中学3年生  
の適応態勢
  6. 入学試験競争に対する適応態勢
  7. 入学競争の社会的条件
  8. シンポジウム： 諸外国の入学試験制度
- 
-

# 文 献 紹 介

1

「京都府教育史一戦後の教育制度沿革（京都府教育研究所編）」「京都市立学校園沿革（京都市教育委員会編）」

上記二書は昭和31年の春4月に公刊（いづれも非売品）されたものである。前者は609頁、後者は582頁の量は相当なものである。平安の昔以来京都が先進諸国の例をふんで日本教育史とその成長を平行せしめていることは日本教育史の立証するところである。戦後の教育改革に於て全国に率先して京都が新教育の実施に忠実であったことも伝統上当然のことであろう。その意味で前者は興味ある記録となって将来に残る筈のものである。後者はかつて京都小学三十年史（明治35年）をものして貴重な記録を残してくれている京都市が、現在の学校に当って近代日本の初等中等教育史を簡単に縮図する意味で編纂されたものである。京都府教育史の場合はかつて京都府教育五十年史前篇が出され、後篇は故高橋俊乗教授の手で原稿が完成したまま予算の都合で未出版のまま放置されているのであるが、この中途の部分を抜きにして、戦後の10年間の歩みをまとめたものである。6—3—3制の完全実施、総合高校制の今日に至るまでの維持、通学区域の6—3—3—1貫方針等等数数の新しい線を勇敢に実施した跡の回顧談である。丁度時を同じうして京都市の教育行政の末端につらなっていた筆者は感慨深く読んだのであるが、当時何の関係もなかった人がよんで感慨を起すほどの魅力がこの書が持っているかどうかは疑はしいものがある。重要な記録として後日に残るのであるから通り一遍の事務的なものでなく、真剣な態度でもっと取り組むべきであったろう。予算の都合だったかも知れないが、一寸惜しい気がするのである。京都市の場合もガリバン刷りの粗末なものである。事務当局の苦衷もわからぬではないが、京都小学三十年史が数千円の値段で売られている現状を思うとき、（京都市立学校園沿革ですら臨川書店の目録をみると800円という値段が出ていた）執筆スタッフを充実して将来に残るに足るほどのものにしてほしかったと思うものは筆者一人ではあるまい。

しかし可成りの頁数をもったこうした書物が地方教

育行政当局から出されたことは敬意をはらはれて然るべきことであることは云うまでもない。京都市教育研究所の某氏の語るところによれば東京から最近訪ねてくる人の中に特に「京都市立学校園沿革」を指名する人びとがある由であるが、この書が興味をもつ人からは注目されていることを示すものである。京都市の学校の由来を一応知りうるよすがとはなり得るものである。これを手づるにしてそれぞれの学校の縁由を史的に考証して迎れば生きた日本の近代学校発達史が出来上るであろう。正式の印刷による完成版を京都市教委当局に期待したい。京都府教育史の終りに、新学制発足当時の関係者座談会速記要旨がのせられてあるが、ここにのせられているもの以上に、暴露すると面白いことが多々あった筈である。誰かの手で文字にしておいても決して無駄ではあるまいと思われる。この誌上をおかりして京都市府両教育当局にお願いしたいことは、京都の各学校には創立以来貴重な教育関係文書が残っている筈であるが、それを計画的に整理してどこかにまとめて保存されたら、特に明治以降の日本の学校発達史の研究に関心をもっている人達には感謝されることだろうから、適宜の処置を講じて学校に分散している関係公文書や教科書などの整理保存を図ってほしいことである。

## 竹内義彰著「職業教育史」

戦後啓蒙宣伝的なものが教育学界に些か流行しすぎてうんざりしていたのであるが、今回竹内君が書いた職業教育史（昭和32年10月15日関書院発行）を手にしてみて、単なる啓蒙宣伝的な域を脱し、本格的にほんとうの人間教育にとっくんだ書物のように思はれたのでこの紀要に紹介のペンをとる興味を感じたわけである。この書は所謂新教育の内容の一部としての職業教育の解説とか職業指導の説明とかいうものではない。人間教育の本質にどっか腰を据えて教育の本筋として職業教育の発達を追ったものである。第1章職業教育の概念に於いては可成り念に歴史的にその意味の変遷を辿っている。「職業の職業たり得るゆえんは、それが単なる仕事でなく、常に個人を超えた全体ないし

社会を予想する仕事である点にある。つまり職業は社会の一員としての個人が、それをもって社会全体に連なるところの分担であり、また役割なのである。職業が個人と社会を繋ぐ橋であるといわれるのも、このような意味からである。」(26頁)と指摘していることは十分に正しい。しかしこの章に於いて語義学的に職業を説明すること以上に、人間はその本質に於いて職業人であることをこそ、もっと根本的に論ずべきであったろう。でなければ「職業教育とは何であろうか、一言にしていうならば、職業人の教育である。あるいは職業のための教育である」(28頁)のことばも卑俗にしか受けとられないであろう。「実業」ということばについては著者のもつ解釈とは別に、虚業に対する実業としての意味もあるから、この言葉の発生状況について著者の更に詳細なる検討に期待したい。

第2章は「教育的事実の発生」というテーマで教育の発生を論じているが、人類社会の発生とともに教育的事実は生じたとのべている。「生活と共に始った教育的事実は、常に生活の基盤であり、社会発展の要因であり、技術分化の根本的な一条件であった」とし、「高度に体系化された組織化された今日の教育の祖型を、このような教育的事実求めようとするのである」

(47頁)としているのであるが、この章はむしろ informal education と formal education との関連に於いて教育の発生を社会的にトレースする方が妥当なのではなかったろうか、そうすれば第3章「職業の発生と意図的教育」のテーマの展開も自然になってきて、意図的教育の成立もはっきり論理的に根拠づけられよう。また「人類社会における一大特色としての意図的な教育は、民族共同社会における生産的な生活過程に成立したものである、人類の文化は、人類が道具を使用し、また相互扶助のための協力をなして、各自の力を節約するのと比例して進歩する。かかる力の節約は次第に高度の教育を必要とするようになる。つまり生産技術が発達し、労働生活がますます計画化され組織化されるに従って、社会生活は次第に合理的になり、素朴な教育的事実は徐々に意図的計画的な教育行為にまで発展してくるのである」(48頁)という発言を一層発展させて人間の生産活動と「手」の問題を結びつけて第3章の意図するところのもの根源的解明もなすことが出来たであろう。学者達の紹介的解説から理論的支持を仰ぐ前に、もっと根源的な探究がこうした章に於いてはなされるべきであろう。でない

著者の折角の創意も精彩がなくなると思う。著者はたしかに新しい感覚をもっているだけに、孫引き理論の展開に終始した観があるのは惜しいことである。

initiation に関しても根本的研究が必要であろう。第2章、第3章の事項については専門的研究書がある等である。

第4章は「奴隷制的古代国家の職業教育」であるが、「奴隷制的古代国家の根本的特色は、奴隷所有者階級と奴隷階級の決定的な分裂ないし対立である。それは生産手段の所有者と筋肉労働者からなる生産的関係であり、支配者と被支配者、治者と被治者の政治的服従関係である。このような事情のもとに於いて、古代奴隷制国家の教育が、民族共同社会におけるそれと大いに異った性格をもつようになってきたことは至極当然である」(63頁)とし、奴隷所有者階級の独占する学校教育と、奴隷ないし生産者階級における徒弟的教育とに著者が分けていることは公式通りである。古代国家における生産者層における徒弟的教育についてはその消極的存在を指摘する。日本の場合についてのそれをやや詳しくのべているが、これ亦更に一層の根本的研究を期待したい。第5章は「封建制社会の職業教育」である。この章になると理論の展開は非常に詳しくなってくる。梅根氏に理論的支持を求めて、「奴隷制社会においてかなりひっそくし、また退化していたところの生産庶民層の教育は、十三世紀頃から再び擡頭するけいを見せ始めるのである。生産技術や経営実務に関する教育として最もよく知られているのは商工業者の同業組合の中に見られる徒弟制度である。」(82頁)とし、一方、古代国家に成立した特権的貴族的学校は、「指導者層の子弟の教育機関として、封建社会にも受継がれた。……学校教育の伝統は野蠻人の侵略を受けず、しかも教会的性格の極めて強かったヴィザンチンを通じ、またアラビア人を通じて、中世社会に再びめざましい発達をとげるのである。」(83頁)という。この章の第2節で武士階級の教育を論ずるが、コンスタンチノフやデュエーイの論が引用されるのは少し不自然のそりしはまぬがれまい。教会学校と中世大学についても根本資料にふれるべきであろう。「生産庶民層の生活のための教育一徒弟教育、都市学校一は、これ等の圧力を排して、徐徐にはあるが発達の過程を辿るのである」(91-92頁)という表現も実証的になされるべきことであろう。第6節で都市学校と寺小屋を比較しているのであるが、日本

の都市学校として寺小屋を把握し、「寺小屋は初期の純私塾的性格を次第に失い、幕府ないし諸藩の御用教育所的性格を帯びるようになってきたことは争えない。しかし庶民の実生活に必要な読み、書き、計算を教える場所としての寺小屋の本来的な役割は、やはり依然として持ち続けられたのである。従って、庶民の生活に必要な一般的教育を与えるに当って、画竜点睛の意義を持ったのが、封建的儒教的道徳習慣の形成であった。寺小屋教育のこのような複合的性格、つまり庶民の実生活—職業生活—に必要な最低限度知識と技術を与えると共に特定イデオロギーによる市民的訓練をも行なおうとする寺小屋教育の成立は、近代的学校教育発達の有効な地盤となった点において、大きい意義を持つものであった。」(136頁)との理解は正しい。農村の分解に伴う封建社会の崩壊は商品・貨幣経済の発展をひきおこし、これにつれて庶民の教育に対する関心はますます深まり、普及発達する傾向を示し、そのことが封建的支配者を刺戟して、庶民の教育への関心を自己に対する脅威と感ぜしめ、愚民政策をとって庶民の教育を阻止しようとする傾向を生む。しかしこの政策が発効するほど時勢は甘くないから、庶民教育の内容に封建的イデオロギーを強制して庶民の教育組織を援助し始める。そしてこれが幕末における寺小屋教育への幕府や領主の干渉と奨励となってあらわれると著者はいう。これを一層実証することは著者の今後に期待したい。

第6章は「絶対主義国家と国家教育」と題して問題は核心にふれたしてくる。明治維新に入って近代国家の仲間入りをした日本は先ず国民教育の整理を企図する。しかし絶対主義国家なるが故に方向は上からのものであると著者はいう。「特権階級は、自らの営利追求活動をより合理的に遂行するためには、中央集権的な国家機構を整備し、産業活動をより一層振興しなければならなかった。そしてそのためには、国民全体の教育が是非共必要になってくる。しかし、国民全体に、批判精神や合理主義的思想を持たせてはならない。つまり忠実で従順な国民を形成するための最低限度の教育は必要であるが、それ以上の教育は不必要であり、かつ危険だったのである。ここに絶対主義教育の根本的な矛盾がある。」(148頁)と著者はきめつける。更に絶対主義教育の第二の特色は濃厚な神秘主義的、宗教的性格にあると云う。又それは複線の学校体系を生み出したとも指摘するのである。いくたびか私達の

眼にふれた解釈であるが、もうそろそろ教育的事実の実証によって展開されたこの種の論文があらはれはじめてよいのではなからうか。

第7章は「産業革命と近代的技術教育」であるが、機械的大工業と近代的技術教育についてマルクスとデューイの見解を中心にして論を進める部分は本書中最も精彩にとむものといえよう。生産活動は近代人にとって本質的活動となってくる。「現代社会の教育は好むと好まざるとにかかわりなく、すべて、産業革命の所産である技術学ないし機械的生産活動と、またその基礎となる自然科学と無関係には存在し得なくなってきた。かつては卑しい仕事として軽視されていた生産的活動及びそれに関する諸知識は、今や教育の全領域に極めて重要な地位を占めるようになってきた」(186頁)そして資本主義の発達普通教育の発達を招来した。これらのことを技術教育と関連づけて英国・フランス・ドイツ・アメリカ・ロシアの例を比較しつつのべている。がこの辺はもっと最近のところまで考察の筆を進めるべきであったろう。この論述の最後に「ソヴェト・ロシアにおける職業教育ないし技術教育の根本的な特質は、それが常に、理論と実践の統一において、換言すれば、一般教育と職業教育の総合において展開されている点にある。」(222頁)として、ポリテフイズムに本当の意味での技術教育、ひいては職業教育の本質をみとめようとしているかのようであるが、これは全く正しい事であるだけに、筆者自身の語学力と感覚とをもって事象を根本的に研究されて力作を世に問われんことを私はひそかに期待するものである。

第8章において日本における近代的職業教育にふれ、今日に至るまでも日本の職業教育の前近代性を指摘しているが、これは私達の身近なことであるだけに、もっと実証的に話を進める方が人を納得させるであろう。最後の章は職業教育の今後の話題であるが、「階級社会の改革過程における職業教育のあり方は、改革の実践についての経験や科学的法則を教育内容や方法的に確に組織化することにある。要するに今後の職業教育の重要な話題は、既存産業社会の正しい—民主的、科学的な—改革にしなければならない」(276頁)と筆を結んでいる。これはあくまでも正しいことである故に、筆者にのぞみたいのは、今後、ホワイト・カラーのイデオロギーをすてて労働者階級の意識のさ中

## 文 献 紹 介

に立って、人間教育の本質としての労働教育を理論づけてもらうことである。筆者はそれだけの情熱と能力

をもっていると私は信じている者である。今後の精進努力の結集としての労作をのぞみたい。(池田進)

### 2

#### 永井道雄編「試験地獄」(平凡社)

この書物は、いまの試験地獄によって、中学生の生活の上におこっている様様な歪みについて、彦根の中学校に在職する3人の教師が、直接に体験をせまられた記録を中心に、それを試験地獄を促進する社会的な全体文脈の中に位置づけて考えようとしたものである。記録そのものは、彦根という小都市にたまたまおこった事柄に限られているが、たとえば進路を異にする生徒間の分裂、入試準備に集中された学習と生活のゆがみ、愛情と虚栄の入りまじった両親からの期待とその重荷にあえぐ生徒たち、このような親と自己の教育観の間に立ってなやむ教師等等、ここに投げ出されている諸側面は、多くが全国的規模で反ぶくされている事柄だと云えよう。その意味で、インテンシブなつまこみがこれをよむ両親や教師のすべてに、もっとも

具体的レベルで問題の深刻さを再認識させるであろう。真摯な観察と追求の態度が正直な表現のスタイルと相俟って、強くうたえる力をもっている。

編者は、さらに、このような現象面にあらわれている問題の社会的な根の深さを、「就職難と入学難」及び「学閥勢力の温存と入学難」という二重の悪循環としてとらえ、したがって、その解決策としては、単に試験制度そのものに内在する問題の検討よりも、むしろ、より根元的な日本社会の政治・経済機構全体と結びつけて、巾の広い打開方向を示唆している。

難を云えば、重要な仮設の実証手続がやや粗略であるが、全体としての論旨はきわめて明快で急所を射たものであり、関係者に広くすすめることができるものである。(森口兼二)

### 3

主として関西関係の人びとの著述で、はなばなしくジャーナリズムに取り上げられないような教育学関係の文献の若干を紹介しておきたい。こうしたことは、今後もつづけて行きたいと思う。先ず教育史的な文献としてあぐべきものに、宮崎大学助教授黒江一郎氏の編纂註解に成る「安井息軒遺文集續篇」(安井息軒先生顕彰会、非売品)がある。これは昭和29年に刊行された「息軒先生遺文集」につぐもので、正統相俟って幕末の大儒の面目をうかがい得るに至ったことは、よろこばしいことで、編集者の労を多とせねばならない。

次は兵庫県教育委員会事務局内におかれた三先生言行録刊行会編の「三人の先生」(非売品)である。これは兵庫県の教育にその卓越した人格と見識とをもって不朽の足跡をのこした岡田五兎、野口援太郎、及川平治の業績思想人柄を各方面から記したA5判332頁の大冊である。明治大正の日本教育史の一資料であるとともに、兵庫県教育が今日ある所以の偶然でないことを窺い知ることができるであろう。こういう仕事は高く評価さるべきである。

次に大阪経済大学教授巡政民氏の「デューイ研究」(春秋社350円)がある。時としては、W. James等に深入りしすぎると思われるくらい、先行思想家との

聯繫において、デューイの思想を「仮説と探求の思想体系」として究明するものである。

神戸外大教授竹田加寿雄氏の「社会科教育の根本的改善」(明治図書、370円)は最近の社会科の教育学的研究としては最も注目すべきものである。米国の諸文献に丹念にあたるとともに、日本の現実の問題をもよくみつめて、研究をすすめていることは、徒らに政治的な評論のみ流行する日本教育学界において稀に見る真摯な学的態度といえよう。社会科は日本の社会の将来を決定するほどの重大性をもつ近代的教科であるにもかかわらず、社会科の本質など一向弁えぬ道徳教育論や歴史教育論の横行する現在において、著者の一貫した研究態度は今後に期待をもたせるものである。

翻訳としては、杉谷雅文・村田昇両氏のシュプランガー「教育学的展望」(関書院260円)がある。

次に家政学の基礎を追求した力作として、京都女子大学教授黒川喜太郎氏の「家政学原論」(光生館380円)があり、少年非行の現象をめぐって、その社会基底、その現象分析その教育学的対策を究明せんとしたものに山口透氏の「少年非行の教育学的展開」(非売品)が「家庭裁判所調査官実務研究報告書」として出ている。(下程勇吉)



# 昭和 32 年 度 講 義 題 目

科 目	講義別	共通別*	講 義 題 目	教 官
教育学教授法	講 義		教育学概論	下 程 教 授
	研 究	大 共	教育の人間学的基礎	下 程 教 授
	演 習	大 共	教育の諸問題；Scheler, M. : Die Stellung des Menschen im Kosmos	下 程 教 授
	演 習	大 共	Pestalozzi, J. H. : Reden an sein Haus	三 井 講 師
教育哲学	講 義		教育哲学概論	高 坂 教 授
	研 究		教育と宗教	西 元 講 師
	研 究		教育哲学の諸問題	F. P. ハリス講師
	演 習	大 共	Nietzsche, F. : Schopenhauer als Erzieher	高 坂 教 授
教育史	講 義		西洋教育史	前 田 講 師
	研 究	大 共	日本教育史	坂 田 教 授
	演 習	大 共	Herbart, J. F. : Allgemeine Pädagogik	篠 原 教 授
	演 習	大 共	西洋教育史	F. P. ハリス講師
教育課程	講 義		教育課程概論	鯨 坂 教 授
	研 究	大 共	教育目的の設定	鯨坂教授・小田助教授
	演 習	大 共	Childs, J. L. : Education and Morals	鯨 坂 教 授
	演 習	大 共	Smith and others : Fundamentals of Curriculum Development	小 田 助 教 授
教育指導	講 義		教育指導概論	片 岡 教 授
	研 究	大 共	道德指導の諸問題	片 岡 教 授
	研 究		生活指導と集団指導	蜂 屋 講 師
	研 究		精神衛生	黒 丸 講 師
	演 習	大 共	Kant, I. : Die Religion	片 岡 教 授
教科教育法	講 義		教科教育法（教育法一般）	小 田 助 教 授
	講 義		国語科教育法	塚 原 講 師
	講 義		社会科教育法	小 田 助 教 授
	講 義		自然科学概論（数学・理科を含む）	沢 瀧 講 師
	講 義		数学科教育法	小 堀 教 授
	講 義		理科教育法（物理）	友 近 教 授

\* “大共”は大学院と学部との共通講義を，“文共”“法共”“経共”はそれぞれ文学部，法学部，経済学部との共通講義を意味する。

講 義 題 目

	講義		理科教育法(化学)	高木教授
	講義		理科教育法(生物)	芦田教授
	講義		理科教育法(地学)	宮本教授
	講義		農業科教育法(隔年 32年度)	柏教授
	講義		工業科教育法(隔年 32年度)	滝本教授・中川教授
	講義		英語科教育法	大谷教授
	演習	文共	独語科教育法	大浦助教
	演習	文共	仏語科教育法	三浦講師 オーシュ・コルヌ講師
教育実習	実習		市内高等学校, 中学校にて実施	
教育心理学	講義		教育心理学	倉石教授
	講義	文共	心理学概論	園原教授
	研究	大共	教育心理学の諸問題	倉石教授
	研究		学習心理学	梅本助教
	研究		社会心理学	高瀬助教
	研究	大共	教育心理学方法論	統講師
	研究	大共	Development of Personality	E. S. ボーディン講師
	研究		心理診断法	高橋講師
	研究		特殊教育	糸賀講師
	研究		教育相談	島津講師
	研究		小児発育生理	小西助教
	研究	大共	精神身体医学	加藤(清)講師
	演習	大共	教育心理学の基本問題	正木教授
	演習	大共	外国雑誌講読	高瀬助教
	演習	大共	Dilthey, W. : Ideen über eine beschreibende und zergliedernde Psychologie	梅本助教
	演習	大共	教育心理学実習Ⅰ(実験・テスト)	高瀬助教
	演習	大共	教育心理学実習Ⅱ(教育臨床)	倉石教授・梅本助教 高瀬助教 正木教授・倉石教授 梅本助教・黒丸講師
教育社会学	講義		教育社会学	重松教授
	講義	文共	社会学概論	白井教授
	研究	大共	近代社会と教育(家族を中心として)	重松教授
	研究	文共	社会調査 — サンプルングの理論と実際 —	渡辺助教
	研究		社会集団	永井助教
	研究	大共	教育社会学の諸問題	重松教授・渡辺助教 永井助教・森口助教 小倉助教
	研究	文共	家族社会学序説	姫岡教授
	演習	大共	Freyer, H. : Soziologie als Wirklichkeitswissenschaft	重松教授

京都大学教育学部紀要Ⅳ

	演習	大共	Moreno, J. L. : Who Shall Survive?	渡辺助教授
	演習	大共	Riesman, D. : The Lonely Crowd	永井助教授
	演習		社会調査実習	渡辺助教授
社会教育学	研究		社会教育の諸問題	森口助教授
	研究		社会福祉学	柴田講師
	研究		マス・コミュニケーションの理論	加藤講師
	研究		映画教育	清水講師
	研究		新聞学	住谷講師
	研究		新聞学実習	藤原講師・平井講師
	研究		放送概論	牧講師
	演習	大共	Linton, R. : The Cultural Background of Personality	森口助教授
図書館学	講義		図書館学概論	小倉助教
	研究	大共	図書館資料の研究—Asheim, L. (ed.) : The Future of the Book の講読を交えて	小倉助教
	研究		学校図書館の諸問題	松本講師
	研究		公共図書館と地域社会	西村講師
	演習		図書館学実習(分類・目録法の理論と実際および図書館実務)	小倉助教
教育行政学	講義		教育法規概論	相良教授
	講義		学校経営学序説	池田教授
	講義	法共	行政法二部	須貝教授
	講義	法共	行政学	長浜教授
	講義	法共	行政法一部	杉村教授
	講義	法経	労働法	片岡助教
	講義	経共	経済原論一部	青山教授
	講義	経共	財政学	島教授
	研究	大	教育法規の研究	相良教授
	研究	大共	学校行政概論	相良教授
	研究	大共	近代日本の教育政策の分析 (明治33年以降)	池田教授
	演習	大共	Aigrain, R. : Histoire des Universités	相良教授
	演習	大共	Mort, P. R. : Public School Finance	池田教授
	演習	大共	Weber, M. : Typen der Herrschaft	池田教授

# 修士論文題目

## 昭和31年度

笠原 克博	実験的経験論の教育観——生長としての教育について——
西頭 三雄児	Natorp における Arbeitsbildung について
清水 俊彦	教育行政における国家の位置とその役割
杉浦 美朗	人間存在の実験的構造——デューイ中期の教育哲学の問題——
村川 紀子	問題解決の学習上における指導の効果について——数学的推理問題を用いて——
本吉 昌枝	反転図形における持続視について
山中 巖	デューイにおける理想の人間像——実験主義的宗教観をめぐって——
和田 修二	教育の存在論的基礎に関する一考察——テイリッヒの存在論を中心として——

## 昭和32年度

阿部 八郎	集団心理療法の研究——精神分裂病患者を中心に——
新井 英彦	役割理論——役割行動の社会化についての一考察
大森 定光	教育と物質的生産の結合に関するマルクスの教育観
栗田 修	デューイ研究・人格形成としての教育
柴野 昌山	現代日本人の社会的性格と逸脱行動
諏訪 公一	ラジオ広告に関する実験的研究
谷川 守正	創造と教育——創造的人格性の人間像の基礎
高比良 房子	近代家族における主婦の役割について——都市家族の一断面——
西岡 忠義	精薄児施設における集団力学的体制と人格特性の連関について——人格形成過程認識の試み——
沼田 敏	明治時代における国民統合の過程
富士 貴志夫	現代社会教育の問題点——ある田舎町の婦人学級——
藤本 浩之輔	新中間層の疎外現象とパーソナリティ
村田 鈴子	日本の大学制度に関する研究

# 本科卒業論文題目

## 昭和31年度

朝日 利勝	教育勅語成立に関する教育政策史的考察
芦田 謙二	McIver に於ける文化と技術の秩序について
足立 喜代子	企業体に於ける人間関係の一考察
石井 久夫	「義務教育の財政的基礎」——教育財政論——

京都大学教育学部紀要 IV

石塚	哲也	教育行政における中央集権化の傾向について
市川	純雄	自律神経機能状態と性格について
伊藤	徹	要求水準行動・選択行動・パースナリティの相互関係——中学生に数学計算問題を課した場合について——
井上	公大	しつけ診断の方法——しつけにおける条件の分析と測定——
居原田	暹	公教育制度の歴史的展望——比較教育学的考察——
今栄	国晴	言語習慣の学習及び知覚に対する影響について
今阪	裕次郎	教育と政治——教育の政治的中立性——
岩井	清	「教育目標」小論——キリスト教教育の目指す人格——
牛尾	浩三	デューイの主題による芸術と人格の形成
岡田	渥美	イギリス教育の近代化過程に於いて見たるヨーマン階層
川瀬	圭二	「社会的連帯性と教育」——E. Durkheim を中心として——
楠見	弘文	教師の社会的地位——その教育行政的考察——
久世	実	教育委員会制度における問題性
坂根	史夫	キルパトリック W. H. における学習について
四方	万二	デューイ研究——経験哲学を中心として——
篠田	益実	行動検査における評価者の異同による差異の考察
鈴木	順子	「情操教育」——芸術活動を手段とする教育方法——
数藤	茂	地図とグラフと彩色効果に関する実験テスト
高木	英明	大学行政における根本的問題に関する研究——大学の本質と大学の自治——
竹内	靖	フランスにおける大学制度の研究
竹中	靖雄	米国公共図書館における委員会制度について——比較社会教育行政的アプローチ——
武吉	孝	生活綴方運動——その歴史と問題点——
津金沢	聰広	近代婚姻家族をめぐる子供の社会化過程の問題
辻	雅子	明治実業教育政策史
中山	陸衛	コミュニティ・オルガニゼーションと社会教育
野口	澄男	ヘキ地複式学級における学習指導に関する一考察
東川	幸三郎	明治初期における立法機関の一考察
増田	実	紡績女子工員の寮生活を中心とした企業内の人間関係について
松田	武生	視聴覚的にみたメッセージの伝達効果について
向畑	忠夫	従業員態度の追求の研究——主として非公式交友関係・性格特性・生活史より——
森田	良国	地方教育行政組織の考察
八木	密夫	都市化の問題と成人教育について
横田	憲	文化的環境としての漫画の機能及びそのユーモアの発達の考察
若林	雄治	教育公務員人事行政論
渡辺	敬夫	大衆と小集団——マス・コミュニケーションにおける受け手研究の立場——

卒 業 論 文 題 目

昭和 32 年 度

岩 井	虔	音楽学力に関係ある諸因子の分析的研究
遠 藤	豊	教育令改正における国家主義教育政策
大久保	哲 夫	産業の発展と民衆教育——ペスタロッチ研究試論——
岡 田	至 雄	ソシオメトリック・テストの妥当性、信頼性および有効性についての考察
小 野	修	中学生の劣等性意識について
柿 沼	康 隆	週刊誌の社会的背景（週刊誌の基礎的研究 その1）
加 藤	綏	非行少年の保護政策
上 坪	隆	ジョン・デューイにおける習慣と道徳性について
金 子	忠 史	各国の義務教育における学校制度の比較研究
木 村	英 生	週刊誌の用途と満足（週刊誌の基礎的研究 その4）
栗 本	一 男	大学の機能及び自治に関する一考察
齊 藤	久美子	自己意識の分析による人格適応性の一研究
新 谷	義 郎	デューイの経験と教育
住 田	幸次郎	思考発達の実験的研究
高 野	明	サラリーマンの生活と週刊誌の機能（週刊誌の基礎的研究 その3）
武 政	司 郎	葛藤の教育的問題性
中 島	淑 夫	中学生父兄の教育に対する意識及び態度の調査報告
中 根	正 節	新聞の基本的機能について
永 田	明 己	教育の投資的価値の分析
成 瀬	富 夫	デューイの新しい個人主義
松 永	宜 範	ペスタロッチの労作教育
松 本	忠 治	わが国教科書行政制度の一考察
村 上	明 子	W I S C 及び Rorschach Test による精神薄弱児人格の研究
村 山	正 治	臨床心理学における科学と哲学——ピンスワンガーの現象学的人間学に関連して——
目 釜	尚 民	公共図書館における“Great Book” Discussion について
毛 利	建 雄	教育における学校と家庭の協力
元 岡	哲 也	マス・コミュニケーションの効果と影響力について
山 崎	泰 男	経営体内におけるインフォーマルな組織
藪 本	薫	戦後の日本における教育制度改革
和 佐	怡代子	週刊誌におけるヒューマンインタレスト（週刊誌の基礎的研究 その2）

# 京都大学教育学専攻卒業生著作目録 補遺\*

伊藤献典 (大正6年卒)

〔著 書〕

修証義の基本精神	愛知学院大学出版部	昭和30年
教育原理	同 上	昭和31年
曹洞聖訓	同 上	昭和31年
論理学概説	同 上	昭和31年
教育学方法論史	同 上	昭和31年
教育史概説	同 上	昭和32年

〔論 文〕

司書たる資格の最低を為すもの	愛知図書館協会会報第14号	昭和29年
教育作用の規範「道」続篇	愛知学院大学論叢第1巻	昭和29年
現代我国公立学校教育の盲点	同 上 第1巻	昭和29年
正法眼蔵生死巻高祖示衆の真偽につき宗学匠の教を乞う	同 上 第1巻	昭和29年
正法眼蔵生死巻の真偽について 続篇	同 上 第2巻	昭和30年
現今社会教育の趨勢とその根本問題	同 上 第2巻	昭和30年
現代学生の見た鷹博作鏡の話	同 上 第2巻	昭和30年
正法眼蔵生死巻親撰の真偽について 続続篇	同 上 第3巻	昭和30年
日本青少年の宗教教育	第2回全国教誨師大会記念論集	昭和30年
宗教教育の基礎問題	東海仏教第2輯	昭和31年
教育は宗教によりて完結される	現代と仏教6号	昭和31年
従容録の現代教育的解説	愛知学院大学論叢第5巻	昭和32年

\* 京都大学教育学部紀要Ⅲ, 204—211頁参照。

## English Abstract

### Five Educators : Their Lives and Academic Achievements

The present special issue has been devoted to the study of the lives and academic achievements of the five outstanding professors of education, now deceased, who served Kyoto University for many years since its inauguration in 1906.

They and the authors writing about them are :

- Professor Tomeri Tanimoto—by *S. Ikeda*, Professor of Education, Kyoto University,  
Professor Shigenao Konishi—by *H. Kataoka*, Professor of Education, Kyoto University,  
Professor Motomori Kimura—by *H. Maeda*, Professor of Education, Osaka City  
University,  
Professor Shunjo Takahashi—by *B. Nakazima*, Professor of Education, Kyoto Technical  
University,  
Professor Sukeichi Shinohara—by *Y. Shitahodo*, Professor of Education, Kyoto Uni-  
versity.

The first three were the professors responsible for the series of lectures on education offered at Kyoto University from 1906 to 1946 successively, and the other two were lecturers both on education and the history of education. All of these scholars have made unique contributions to the development of Japan's education since the days of *Meiji*.

*Tanimoto* (1866-1946) earned the degree of Litt. D. in 1905 for his study in pedagogy, the very first doctorate in the field of education in this country. He is a Japanese pioneer of the Herbartian educational theory, and he has contributed a great deal to the development of education by his interpretation of European educational thought and practices. He was much interested in religious education and was also noted as a public speaker.

*Konishi* (1875-1948) was appointed professor of Kyoto University in 1913 and became the President of the University in 1933. He had come to be quite influenced by the educational theories of Pestalozzi and Rousseau. In his later years he devoted himself to the study of *Tanso Hirose*, a distinguished educator in the history of Japanese education and finally reached his own metaphysical views of education—*kei* (reverence), *ai* (love) and *shin* (fidelity). A good many Japanese educators have been influenced by his preëminent personality.

*Kimura* (1895-1946) remained professor of the University from 1940 until his death. He established his unique philosophy of education through his extensive studies on the German Idealism of Kant, Fichte, Hegel and their disciples on the one hand and the Nishida Doctrine on the other.

*Takahashi* (1892-1948) is the author of *The History of Japanese Education* (1923), *The History of Japan's Educational Culture* (1933), and *The Origin of Schools in the Early Modern Age* (1943). His major field of study was the history of Japanese education. He served the University as lecturer for many years.

*Shinohara* (1876-1955) published more than twenty volumes on different subjects during his academic career of over fifty years. He has established a permanent position as organizer of the most systematic educational theories in Japan since the days when Western philosophies and thoughts on education were imported for the first time into this country.



He was appointed professor of Tohoku University, Sendai, in 1923, and of Tokyo University of Education in 1930. He served Kyoto University as a lecturer.

## A Cooperative Study of the College Entrance Examinations

### I. Aims of the Present Research

Applicants for higher education, particularly for colleges and universities, compete harshly with one another in Japan, and the competition has given rise to many debatable issues. For example, in many high schools, both junior and senior, supplementary classroom work has been added to the regular curricula in order to prepare the students for the forthcoming college entrance examinations; and not a few boys and girls stay in their classrooms from eight o'clock in the morning until five in the evening. Some schools have reorganized their normal curricula into new ones in such a manner as to center around those subject-matter fields covered by the entrance examinations.

Japanese youngsters are required by law to stay in school until their fifteenth birthdays, six years in the elementary school and the following three years in the junior high school. Which junior high schools they are to be enrolled in upon their graduation from individual elementary schools depends upon their places of residence.

Many prefectures (*ken* and *fu*) have set up regulations under which junior high school graduates must apply for entrance into a given senior high school. They can elect only the one designated under those provisions of the law which limit their choices in accordance with their residences. In every prefecture without exception, however, these provisions have been violated all too often. Such violations have been practised at the levels of both senior and junior high schools. Student violators have been enrolled in those senior high schools where a large percentage of the graduates have succeeded in the entrance examinations during the past few years. Such high schools are eagerly sought out by many boys and girls. They often change their residences temporarily to a school district where a good senior high school is located so that they can be formally approved and enrolled in one of the junior high schools of the same school district.

A large number of senior high school graduates fail in the entrance examinations for colleges and universities. Many of them await the next opportunity studying meanwhile solely for the entrance examinations. (These students are the so-called *ronin*, the term originally meaning an unemployed *samurai*.) These youngsters usually attend special schools (called *yobiko*, preparatory schools) where they are exclusively trained to pass the entrance examinations to colleges and universities.

After the turn of the year in Japan almost every newspaper headlines articles relating to the entrance examinations to colleges, universities and senior high schools to be administered in March. These contain, for example, reports on the competition rates of individual colleges, universities and public senior high schools, expert educators' views and advice for parents whose children will take the forthcoming examinations, comments on what care should be taken of their children's psychological and physical health and on the choices of institutions. Papers report at this time every year that half a dozen young people have killed themselves or run away from their homes either in fear of the examinations

when the examination week drew nearer or because of failures after the examinations.

By reviewing some of the existing practices described above, it can be observed that the vital objective of education—the formation of desirable personality—can hardly be realized, due to the fact that both teachers and students have been compelled to devote their time and energies to achieve student success in the entrance examinations for higher institutions. This has become the goal of education.

The aims of the present research, then, are to analyze these disturbing practices and to determine insofar as possible on the basis of the facts elicited by our extensive surveys the causes giving rise to the competitive entrance examinations. Those areas which have already been covered by other researchers in connection with the entrance examinations are excluded from the present study.

The names of the individual researchers are listed at the end of this résumé together with the research study areas for which each was responsible.

## 2. Historical Background of the Japanese Entrance Examination System

The first thesis deals with a brief history of the entrance examinations in this country. Opening its discussion on the matriculation system into the higher institutions for the training of the central government officials during the periods of *Nara* and *Heian*, it reviews then the systems for screening the candidates for the higher schools and universities through the *Tokugawa Shogunate* and the *Meiji* Eras, and up to the period just before World War II emphasis has been placed upon the historical development after the establishment of the new educational system in the early period of *Meiji* after the Restoration.

The problem of vital importance confronting New Japan in the early years of *Meiji* was to absorb the cultures and technologies of the Western countries with their advanced civilizations in order to build up for herself as quickly as possible a modern state with a strong government organization. To achieve this aim it may be justifiably said that the higher institutions beyond secondary education had been charged with the education of an élite to be the leaders of the people in accordance with the demands of the state. The objective of education was to make this élite acquire as much knowledge and information as they could from the advanced countries of Europe. What was most important, therefore, was the quantity of knowledge. The selection of candidates was dependent only upon the measurement of the amount of information one had in several subject-matter fields.

It was not before the 1920's that the trend of emphasizing intellectualism and the voluminousness of one's amount of information was gravely criticized. In 1927, for example, the written tests in the subject-matter fields were eliminated in sorting out the applicants for the five-year middle schools. The primary selection was made on the basis of the reports on individual applicants filed by the principals of those elementary schools from which they were graduated. The secondary selection was based on physical check-ups and individual interviews during which the candidates were checked on their common-sense knowledge as well as their character trends. And the final screening was done by lot if the twice chosen candidates were beyond the capacity of the school. Such was the system in those days. A few years later, however, the system was discarded entirely and the written tests in several subject-matter fields again became the tools by which sift the applicants. In 1939, however, the examination system was again bitterly criticized and the

## English Abstract

new system returned to one almost identical with that of 1927.

As obviously seen in the development of the ways of selection of candidates to the pre-war middle schools (from 7th grade through 12th), various devices had been worked out for the improvement of screening systems and the techniques in setting up test items. However, the long standing trend to over-emphasize the quantities of information has been unquestionably governing, and especially the matriculations to the higher institutions have solely depended upon the written tests in major subject-matter fields. This trend is still predominant. The several devices which had been worked out for sorting out candidates to middle schools were hardly effective for getting rid of those vices and iniquities occasioned by the competitive entrance examinations peculiar to Japanese schools. The causes have been analyzed to a considerable extent in the following article *The Social Conditions Surrounding the College Entrance Competition*. Its conclusion is that academic criteria and social reputations of colleges and universities are so varied that it depends entirely on the school itself to which one goes whether a student secures better employment or not after his graduation.

### 3. Present Practices in Regard to the Entrance Examinations

After the surrender the educational system of Japan was reformed on a large scale in accordance with the directives of SCAP (Supreme Commander for the Allied Powers). The years of compulsory education were extended from six to nine years. The former 6-5-3-3 plan was changed into the new 6-3-3-4. The screening system of the freshman candidates was also changed by the instructions of the Occupation; viz., after 1947 the same academic aptitude tests were administered to all the applicants, no matter which college or university they chose; and these scores were treated on an equal basis with the reports turned in by the principals of the several schools from which the applicants were graduated and with their entrance examination scores. Colleges and universities, however, challenged pretty severely the aptitude tests because of their traditionally profound respect for subject-matter test scores. With the close of the Occupation criticisms against the aptitude tests became more serious; and finally, in 1954, unable to stand up against them, the Ministry of Education proposed a compromise: the scholastic aptitude tests may be independently made up and administered at individual colleges and universities. Ever since then it has turned out only perfunctory to check up on the aptitude test scores and the reports from the several schools of the applicants, and the written examinations have remained as exclusively dominant as before.

This section of the present research deals with the legal background of the entrance examinations. At the present time there are detailed rules and regulations governing the entrance examinations of the public senior high schools, but for the colleges and universities, practically none. There is merely an article that rules be set up by the college president in conference with the faculty-members with respect to the matriculation of students. Actually, the Ministry of Education distributes every year among the national universities and colleges its official letter of instruction on the year's entrance examinations; but the existing practices are that the scores of the written tests on several subject-matters are exclusively determinative, and that the students' total scores are the sheer sum total of the marks of the written tests in the several subject-matter fields.

#### 4. Matriculation on a Competitive Basis : the Present Situation

It is now a crucial social problem, widely discussed by people in every community, that all high school graduates who wish to do so can not enter the colleges and universities. On the one hand they are all assumed to be fully qualified to continue their further studies in the higher institutions because they have completed the requirements of the continuous school system with its 6-3-3-4 plan ; and yet on the other hand, notwithstanding these swelling crowds of qualified applicants, each university's capacity is limited beyond which no students can be matriculated. The number of qualified applicants is always far more than the number that can be admitted.

The total number of the applicants for admission to colleges and universities was some 666,000 in 1956. Meanwhile the freshman capacity of the nation's higher institutions was not more than some 116,000, that is, 17.5 per cent of the total applicants. And it is worth notice that this percentage has been declining year by year after the war. The *national* universities' freshman capacity is 43 per cent of the whole freshman capacity of the nation's colleges and universities ; the *prefectural* higher institutions', 5 per cent ; and the *private* institutions', 52 per cent. During the past decade private institutions have expanded their freshman capacities enormously while national universities have remained about the same.

What is worse for applicants is that the national universities practically never admit the freshmen to capacity, but somewhere around 92 to 94 per cent ; meanwhile private institutions admit some 45 per cent more, and prefectural colleges and universities, some 10 per cent more freshmen than their capacities. Hence the total number of freshmen is approximately 20 per cent more than capacity for all of the nation's higher institutions.

In many cases, however, the same student files his or her application in more than one institution, so that the number of applications turned out in 1956 to be 1.6 times as many as the actual number of applicants. Therefore, the actual entrance-rate of the same year, that is the ratio of the number of freshmen admitted to the actual number of applicants, was 38 per cent.

After the war the graduates of the nation's senior high schools tremendously increased. So did the applicants for admission to the higher institutions a 60 per cent increase during the past four years. Meanwhile, the capacity of the nation's colleges and universities increased by only 30 per cent. Naturally the *ronin* students increased! In 1954, 30 per cent of all applicants and 35 per cent of all freshmen admitted were *ronin*.

In 1956, 44 per cent out of the 630,000 students of the colleges and universities all over the country lived in the Tokyo Metropolis ; and 71 per cent in those six prefectures which have the nation's top six largest cities. Those who are in the national universities located in these six prefectures are 35 per cent of all national university students ; those who are in the local college and universities in the six prefectures are 71 per cent of all student in the nation's prefectural institutions ; and those in private institutions in the six prefectures come up to 94 per cent of all in private higher institutions of the nation. This helps to indicate that most of the private colleges and universities have centered in Tokyo. Sixty-six per cent of the nation's college and university students live in Tokyo. Excepting the private institutions, the ratio of the number of applicants in metropolitan Tokyo to that of fresh-

## English Abstract

men admitted is lower than that in the other prefectures.

The Scholastic Aptitude Tests had been administered to all applicants for every national university in Japan for the eight consecutive years from 1947 to 1954. We have collected each year's average scores of the freshman classes from all the universities, and placed the classes in order on the basis of their scores. Those old institutions which had been established under the old educational system were always found in the higher bracket; and the rank correlations of the eight school years turned out approximately  $+0.95$ , viz., the ranking order among several universities being fixed. In 1954 rank correlation of the Aptitude Test scores and the entrance-rates was  $+0.82$ ; that of the Aptitude Test scores and the *ronin*-rate, the percentage of *ronin* among all entrants, was  $+0.56$ ; and that of the entrance-rate and the *ronin*-rate was  $-0.68$ . Generally speaking, the better the institution, the lower the entrance-rate and the higher the *ronin*-rate.

The Aptitude Test scores were analyzed on the basis of several departments such as law, science, literature, pharmacy, economics, engineering, agriculture and education, and also on the basis of the broader divisions such as arts and science, and education. The scores of such departments as agriculture, education and other teacher training institutions were lower than those of the others, perhaps because they had been higher technical schools under the old educational system and have been elevated to the college level only after the war.

The present study obviously indicates that students choose the higher institutions on the basis of their past reputations rather than those departments in which they want to specialize consonant with their academic interests.

### 5. & 6. Life Adjustments of the Youth Facing the Competitive Entrance Examinations

The following two theses deal with the everyday life of the youngsters facing the competitive entrance examinations, and attempt to locate the source of the problems involved in the process of their life adjustment. The first essay is primarily concerned with junior high school students. The graduating class pupils (9th graders) of twelve junior high schools were chosen in Kyoto and Hyogo prefectures for this investigation. Major findings of the study are the following three: (1) In order to prepare for the forthcoming entrance examinations almost 10 per cent of the youngsters investigated tremendously limit their leisure time for recreation, although they are still as young as 14 to 15 years of age; (2) approximately 3.3 per cent of the students specially prepare for the examinations under private tutors; (3) girls are under more strain than boys due to the pressure of preparing for the examinations. A few boys and girls were found exceptionally overwrought and losing needed time for rest.

The second essay deals with some of the life adjustment problems of the young people seeking entrance into colleges and universities from senior high schools and private preparatory schools. This study is based upon the responses to the questionnaires gathered from 416 preparatory school students who have failed once or more times in the examinations, 410 senior high school students who have not yet taken college entrance examinations, 2260 college students who have passed the barriers, and 248 parents whose sons and daughters have been preparing for the forthcoming entrance examinations. The questionnaires vary from 19 to 57 items according to the variations of the groups. Some of the items are:

questions about the student's mental attitudes in facing the entrance examinations; question about the student's way of life if in any way unusual as one preparing for the coming entrance examinations; inquiry into his or her principles of life in respect to the entrance examinations; a section for the student's criticisms of the existing entrance examination system and suggestions for its improvement.

Although many students are not themselves worried so much over the entrance examinations, according to the returns of our inquiries, some of the problems many encounter have been found really disturbing. People are generally of the opinion that the entrance examination is an unavoidable barrier to pass over for a young student. They are inclined to assume that the painful experience will do much good in the personality development of young people. On the contrary there is evidence that the desirable growth of personality has been hurt. Preparatory school students, for instance, have fallen victims to neurosis more often than other young people. Distortion in the process of otherwise normal development brings necessity emotional imbalance to college boys and girls in this country.

It may be almost impossible to eradicate all evils and detriments in conjunction with entrance examinations, but there are some measures that can be taken immediately to improve the guidance services of individual schools, particularly the counseling services for the students seeking entrance to colleges and universities.

## 7. The Social Conditions Surrounding the College Entrance Competition

(1) As indicated already, the competition among applicants for colleges and universities is extremely severe in this country, and the competitive examinations have produced many deplorable phenomena. This article, the last of the series, aims to shed light on the various social conditions accelerating the competition among the applicants for entrance into the nation's higher institutions of learning.

The competition comes first of all from the shortage of capacity, a basis like that of other competitions. Are the capacities of colleges and universities so gravely short? It is true that the number of applicants is larger than capacity, our inquiries show; but the capacities of our higher institutions are no smaller than those of any other nations in the world. The number of university students of this country is the third from the top following the U. S. A. and the Philippines. The ratio of Japan's university population to the whole national population is higher than that of the U. S. A., whose university population is 2.5 times as much as Japan's but whose national per capita income is roughly ten times as much as ours, and those of the United Kingdom, France, West Germany and Canada whose national per capita incomes are from three to seven times as much as Japan's. Yet in any of those countries, it is learned, college entrance is not as difficult as in Japan on its competitive basis. The focal point of the question we asked was: "Why do so many young students and their parents firmly persist in entrance into colleges and universities, particularly into some specific institutions?" The chief task we were charged with was to find out some answers to this question among the social conditions of Japan both past and present.

(2) One of these answers is found, according to our investigation, among the characteristics of Japan's social history since the *Meiji* Restoration. When the isolation policy of the *shogunate* was discarded right before its collapse, the national leaders became aware of the under-development of the nation compared with the advanced countries of Western

## English Abstract

Europe. The foremost policy of the new government, therefore, which started an unprecedented innovation, was to build the nation into a strong modern state, reflecting economic prosperity and military power, by means of the capitalistic production system characteristic of the civilized countries in Europe.

In order to meet such a need of the state was it urgently necessary to train new leaders in every sphere of the national life—politics, economy, technology, etc., and particularly able government officials. The former imperial universities were established to fit the needs of those days with the special care and protection of the government. Ever since then these universities have become the centers and models of the other higher institutions of this country. The imperial universities were well taken care of both in staffing and in research facilities and equipment, and the tuition fee was cheap. Naturally-talented youth came together in great numbers to the several imperial universities. Furthermore, the graduates from the imperial universities were privileged to take precedence in becoming government officials. During the *Tokugawa Shogunate* government officials were highly regarded, being without exception of *samurai* families. Even after the *Meiji* Restoration the social status of government officialdom, the governing body of the Emperor-centered state, dominated. And it was almost without exception one of the essential qualifications for high ranking officials to be the graduates of one of the imperial universities. This close relationship between one's successful career and the educational institution from which one was graduated came to be the same in the business world as in government agencies. Before the war, for example, many a first class corporation used to set a starting salary and promotion policy on the basis of the university from which the employee was graduated as well as on the general basis of the employee's educational background. The close connection of one's educational background with one's career in this country will be well understood by the following findings. According to the classification of the gentlemen listed in several different WHO'S WHO on the basis of educational background, university graduates are over 70 per cent of all the gentlemen listed who are only 1.9 per cent of the age-group population all over the country to be deemed as the matrix of the gentlemen. The same trend is certainly more prevailing in officialdom. Through such an historical process as this did the view become widespread that higher education is a safe investment for success in life.

(3) The number of students applying for college entrance has formidably increased in the last few years in comparison with pre-war days. The causes are chiefly the social changes and the reform of the educational system after World War II. After the Surrender efforts were made to realize the principle of equal opportunities for education for all children, and it has been realized in a great measure as part of the large scale movement toward democracy. Government appropriations for scholarship funds have been quickly increased. New colleges and universities have been inaugurated, and the nation's whole university population has swollen. In the meantime distribution of the national income has been more equalized. However, the absolute number of job opportunities appropriate to educational preparation has always been smaller than the number of candidates. Many unsuccessful job applicants prefer further education to unfavorable employment.

The present competition for college entrance comes not only from the shortage of

capacity but also from the fact that the candidates attempt to enter as superior an institution as they can just as they did before the war. Both conditions, the traditional and the post-war, characterize today's college entrance competition. Individual institutions are so varied in quality one from another that one's job placement almost entirely depends on the institution itself from which one is graduated.

The various disparities among colleges and universities may be classified into two categories. One set of disparities results from the capabilities of instruction and research depending on the abilities of the teaching staff, laboratory facilities and equipment, the qualities of the students enrolled, etc. This may be called the "substantial disparities" category. The other set results from the social status and activities of each of each of the graduates. This may be called the "disparities in social forces" category. In order to determine the "substantial disparities" we referred first to the scholastic aptitude test scores for a study of the qualities of the students. For the investigation of instructional staffs we selected and asked seventy prominent scholars in each major discipline to be the judges of the teaching staffs of the several colleges and universities. We then set up the judges' evaluation marks as an index of the qualities of the teaching staffs. Through the use of individual directories we also inquired into the distribution of colleges and universities among those alumni who are now high ranking officials of first rate corporations and governments agencies in order to determine in part the "disparities in social forces" of several higher institutions. We also checked the distribution of the colleges and universities which have successfully placed their new graduates in first rate corporations this year. Scrutinizing those resultant numerical values and comparing them with each other, we have found the assumption proven to a considerable extent that the qualities and abilities of the freshmen entering a university are still projecting a ray of refractive light on job placement through the spectral apparatus of the university with varied substantial disparities and those in social forces.

The names of the individual researchers responsible for their specific areas are :

1. Aims of the Present Research

*Toshiaki Shigematsu*

2. Historical Background of the Japanese Entrance Examination System

*Susumu Ikeda*

3. Present Practices in Regard to the Entrance Examinations

*Ichi Sagara*

4. Matriculation on a Competitive Basis : the Present Situation

*Ryoji Osaka, Yoji Watanabe and Yoshio Takeuchi*

5. Life Adjustments of the Junior High School Students Facing the Competitive Entrance Examinations

*Hitoshi Kataoka, Tsugio Ajisaka and Takeshi Oda*

6. Life Adjustments of the Senior High School and Preparatory School Students Facing the Competitive Entrance Examinations

*Yukichi Shitahodo, Masashi Masaki, Seiichi Kuraishi, Takao Umemoto, Tsuneo Takase, Masato Tanaka, Masami Kasao and Hiroshi Yasuhara*

7. The Social Conditions Surrounding the College Entrance Competition

*Toshiaki Shigematsu, Michio Nagai, Kenji Moriguchi and Junichi Toyama*



編 集 後 記

やっと昭和32年度の紀要の刊行のはこびとなり、はっとひといきしています。いろいろな事情で、やむなく本年もまた予定より大お分くれました。行財政面の事務上の要請もありますので、次年度からは、是非とも軌道に乗るようにと念願しています。

☆ 当号の特質は〈五人の教育学者〉〈入学試験に関する総合的研究〉の二つの特集を掲載したことです。これは本号だけのケースで、次号からは個人発表のものが多くなることと思われま

す。〈入学試験に関する総合的研究〉の場合、ことに、私たちは文脈や用語などの統一に意を尽し、できうる限り一貫したまとまった姿のものにして、発表する計画でございましたが、遂に時間切れとなり、なにかと不備の点もあるかと思いますが、その点、お許し頂たく存じます。

〈五人の教育学者〉の編集の趣旨については、本文

の2頁に述べておきましたが、このテーマの執筆者には、本学部で講義をもっておられる教官のほか、京都工芸繊維大学教授中島萬朶氏（昭和5年京大文学部哲学科教育学教授法専攻卒業）に協力して頂きました。同氏に厚くお礼申し上げます。

☆ 〈英文要約〉については、小泉正美氏に翻訳をお願いし、さらに、F.P.ハリス氏に校閲して頂きました。非常に厄介な仕事を快くお引きうけ下さった両氏に、深く感謝申し上げます。

☆ 遅れをとりもどすため、校正を急がざるをえませんでしたので、ミスプリントが随所にありはしないかと恐れます。ご寛恕の程をお願い致す次第です。

編集委員：下程勇吉 鯨坂二夫  
池田 進 渡辺洋二 高瀬常男

---

昭和33年3月25日印刷

(非売品)

昭和33年3月30日発行

著者並  
発行人

京都大学教育学部

代表者 八木 菫

印刷所

山代印刷株式会社

代表者 山代多三郎  
京都市上京区寺之内通小川西入

発行所

京都大学教育学部

京都市左京区熊野

---

# Kyoto University Research Studies in Education

## Volume IV

---

### CONTENTS

#### Five Educators : Their Lives and Academic Achievements

- |                                       |                          |    |
|---------------------------------------|--------------------------|----|
| 1. Professor Tomeri Tanimoto .....    | <i>Susumu Ikeda</i>      | 3  |
| 2. Professor Shigenao Konishi .....   | <i>Hitoshi Kataoka</i>   | 30 |
| 3. Professor Motomori Kimura .....    | <i>Hiroshi Maeda</i>     | 40 |
| 4. Professor Shunjo Takahashi .....   | <i>Banda Nakazima</i>    | 55 |
| 5. Professor Sukeichi Shinohara ..... | <i>Yukichi Shitahodo</i> | 66 |

#### A Cooperative Study of the College Entrance Examinations

made by All the Faculty Members

- |   |  |     |
|---|--|-----|
| 1. Aims of the Present Research .....   |  | 91  |
| 2. Historical Background of the Japanese Entrance Examination System .....  |  | 96  |
| 3. Present Practices in Regard to the Entrance Examinations .....   |  | 125 |
| 4. Matriculation on a Competitive Basis : the Present Situation .....   |  | 136 |
| 5. Life Adjustments of the Junior High School Students<br>Facing the Competitive Entrance Examinations .....                        |  | 163 |
| 6. Life Adjustments of the Senior High School and Preparatory School Students<br>Facing the Competitive Entrance Examinations ..... |  | 177 |
| 7. The Social Conditions Surrounding the College Entrance Competition .....   |  | 201 |
| 8. Symposium : Entrance Examination Systems in Foreign Countries .....  |  | 256 |

Book Reviews .....

English Abstract .....

---

Faculty of Education, Kyoto University

March, 1958